

農業学習を活用したこども食堂と食育活動～コロナ禍に負けない農福連携への挑戦～
食料環境科 3 年高橋小雪、佐藤静香、山家 歩、
食料環境科 2 年安部 尋、石崎柚希、安部善映、佐藤風馬、淀野海翔

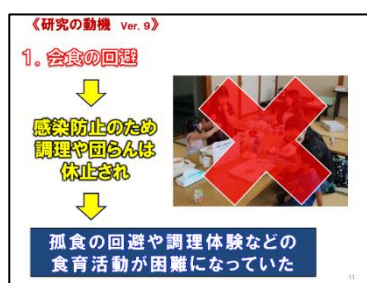
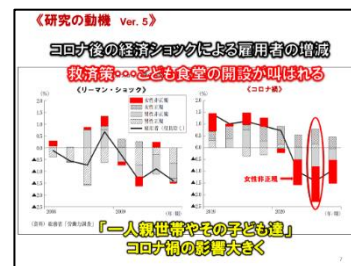
《研究動機》

昨年(2020)の2月。新型コロナウイルス感染症が全国を襲い、約3ヶ月間の休校が始まりました。コロナ禍と呼ばれる疫病災害は経済活動にもダメージを与え、解雇や雇い止めにより収入が途絶えて、生活に困窮する家庭も現れ始めました。社会的弱者の救済が全国的な課題になる中、私たちは「コロナ禍で苦しむ子供たちを助けたい」と考え、登校が再開した6月から、農業学習で子ども達の救済に挑む「食愛プロジェクト」を立ち上げました。

このグラフは、コロナ後の経済ショックによる雇用者の増減を表わし、特に女性の非正規雇用者が仕事を失っている事がわかります。このように、シングルマザーなど一人親世帯やその子ども達には、コロナ禍の影響が大きく、その救済策としてこども食堂の開設が地域でも叫ばれるようになりました。

そのような時、いち早く川西町でこども食堂を開始した、佐藤千恵美さんから「私たちの活動に農生(農業従事者)の力を貸していただけませんか」と依頼を受けました。「地域の子供達のために役に立ちたい」と考えていた私たちは、佐藤さんが主催する「こども食堂なかよしキッチン」との連携活動をスタートさせることしました。

ところが、県内に37か所あるというこども食堂は、新型コロナウイルス感染症により2つの課題を抱えていたのです。1つは会食の回避でした。感染防止のため、こども食堂で重要視される調理や団らんが休止され、孤食の回避や調理体験などの食育活動が困難に



調理体験などの食育活動が困難になっていたのです。2つ目は、感染対策のため、こども食堂をサポートする団体、特に農林水産業や食品関係企業などとの連携が不足してきたという課題でした。そこで私たちは、この課題解決に挑みながら、農業学習を活用した「こども食堂と食育活動」への取り組みと農業と児童福祉の連携に挑戦することにしました。

《研究目標》

研究目標は

1. 農業学習を活かしたこども食堂の開催。
 2. こども食堂や居場所を活用した食育活動。
 3. 農業団体や企業とのサポート体制づくり。
- の3点とし、コロナ禍に負けない農福連携をめざします。

《研究計画》

研究計画です。こども食堂の開催は、昨年11月から川西町などのこども食堂と合同開催を進めながら、独自開催に挑みます。



食育活動は、調理教室や子ども農園などの開催を通して、子ども達に食や農業の大切さを伝えます。サポート体制づくりは、NPO法人、さらにJAや企業と連携しながら取り組みます。

また、こども食堂では食品製造、こども農園では農業と環境の学習などを活かし、食育活動は山形大学が主催する食のシンポジウムに参加し、ご指導を得ながら進めました。



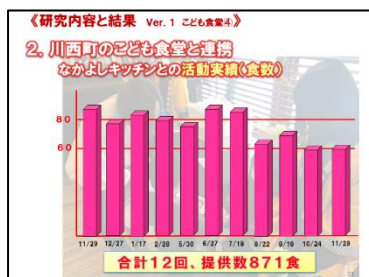
《研究内容と結果》

研究内容と結果です。こども食堂は、昨年7月から食農学習を開始し、紅大豆や米粉を使ったレシピの開発や小中学生を対象にした調理教室に取り組みました。結果、米粉ワッフル、紅大豆マドレーヌなどのレシピが完成し、現在は紅大豆のデニッシュやチーズパンにも取り組み、子ども達に好評でした。



以上の活動に自信を持った私たちは、昨年11月から、川西町や南陽市のこども食堂と連携活動を開始しました。第1回目は、なかよしキッチンとの活動です。食品製造で学んだ技術を活かしバーガー用のパンを提供。これに、町内でレストランを経営する、大竹浩之さんに御指導をいただきながらフィッシュバーガー弁当が完成。感染予防のため、80食の弁当はテイクアウトになりましたが、大好評でした。

2回目はあんパンや、レシピ開発で完成した各種の焼き菓子を提供し、子ども達は大喜び。結果、なかよしキッチンとの取り組みは、合計12回、提供数は871食に達しています。



《研究内容と結果 Ver. 1 こども食堂9》 5. こども食堂の実績

食数	提供回数	提供食数
85	2	170
78	2	156
82	4	328
80	5	400
85	6	510
84	7	588
62	8	504
65	9	585
60	10	600
60	11	660
98	12	1176
114	13	1482
85	14	1230
40	15	400
35	16	560
35	17	495
85	18	1530
60	19	1140

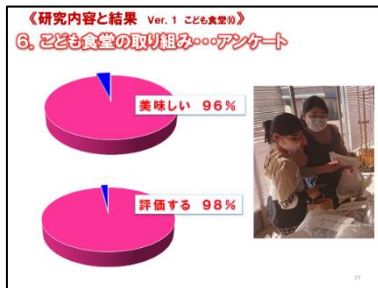
提供回数 19
提供食数約1370

次に、南陽市のこども食堂「地域食堂あまやどり」との連携活動です。あまやどりのスタッフで栄養士の長澤さんが、本校の卒業生というご縁もありスタートしました。スタッフとの検討会を開催後、今年の7月に第1回目、8月には2回目を開催しました。ここでも焼き菓子や手作りパンは大好評。ほぼ月1回の開催を実施し、提供数は382食に達しています。

以上の取り組みで自信を持った私たちは、独自の子ども食堂に挑戦。何回も運営方法を検討した結果、10月10日に町内の空き店舗を会場に「食愛かわにし食堂」を開催しました。40名

の方々に大竹さんとの「テイクアウト弁当」を提供すると共に、パンや焼き菓子もプレゼント。合計3回、110食の提供が実現しました。こども食堂の開催と提供食事数です。回数は19回、食事数は約1370食を数えます。

アンケート調査によれば、「大変おいしかった」「高校生のこども食堂活動を評価する」は、ともにほぼ100%の支持が得られました。



子ども農園の取り組みは、「共助」の受け手だけではなく、自ら食を手に入れる「自助」の大切さを伝えたいと考え開催。さらに、地産地消などの食育や農業への理解促進も目的に実施しました。春先から校内に「こども農園」を準備。定植や栽培管理を続けながら、7月24日に第1回の収穫体験を開催。子どもたちはジャガイモや夏野菜の収穫に大喜び。「おいしそう！」「やったー！」と飛び回る子ども達に、農業の楽しさや大切さを、伝えることができました。子ども農園は、秋野菜の植え付けや収穫、サツマイモの収穫など3回を数え、参加した親子には大好評でした。また、紅大豆の収穫体験を通じた伝統野菜の理解も進みました。

さらに、人形劇の披露など食育教室も3回開催し、合計300名近くの子供達に居場所を提供しながら、農業や食育の大切さを伝えました。



農業団体や企業とのサポート体制づくりは、始めに食品の寄付や提供をお願いするフードドライブを、イオン米沢店にお願いし7月から実施。約半年間の協議を重ね、イオン東北本社の承認を得たこの取り組みは、新聞でも取り上げられると共に、置賜地区内のマックスバリュ3店舗にも拡大。10月までの食品寄付は、約95kg、450品目まで増えています。また、この食品を必要な家庭に配るフードパントリーも延べ96家族に達し、企業との連携が成果を上げています。

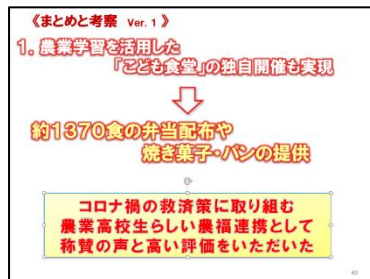


さらに、JA山形おきたま青年部にも協力を依頼し、玄米の提供が実現。委員長の若林さんから「積極的に応援したい」とうれしい言葉をいただき、サポート体制が拡大しています。

《まとめと考察》

まとめと考察です。

1. 農業学習を活用したこども食堂の独自開催も実現し、約1370食の弁当配布や焼き菓子などの提供も継続。この活動は新聞でも大きく取り上げられ、コロナ禍の救済策に取り組む農業高校生らしい農福連携として、称賛の声と高い評価をいただきました。



2. こども農園や居場所を活用した食育が成果を上げ、多くの親子から「楽しかった」「理解できた」などの声をいただき、食育や農業の理解に寄与できました。

3. JA青年部やイオン東北などとの連携が進むと共に、ご指導をいただいた山形大学の佐藤慎也教授から、「農業学習を活用した素晴らしい農福連携の取り組み」と高い評価をいただき、山大学生のみなさんとの連携も決定するなど、食と愛をキーワードにした、農業や企業などの「産」、大学や高校などの「学」、NPOやボランティア団体などの「民」が連携する、産学民のサポート体制づくりが軌道に乗り始めました。



さらに、うれしい知らせが届きました。私たちの活動が第25回ボランティア・スピリット・アワードにおいて、全国9,632名の応募者から、コミュニティ賞を受賞し、全国的な評価を得たのです。今後は、アフターコロナのこども食堂など活動方法の検討や、農業団体や企業との連携をさらに進めながら、コロナ禍に負けない「農福連携を続けます！」終わります。

《感想》

高橋小雪：昨年から続けてきたこども食堂と食育活動が、今年はこども農園や食育人形劇などに拡大し、県大会で最優秀賞を獲得できたことは、後輩に襷をつなぐことができて、とてもうれしく思いました。

佐藤静香：こども食堂はもちろん、様々な活動で貴重な体験を積むことができたと思います。

山家 歩：こども農園やこども食堂、山形大学での研修などは大変有意義な体験になりました。

安部 尋：川西町や南陽市でのこども食堂、学校でのこども農園は、部活動もあり忙しい取り組みでしたが、とても楽しくやりがいのある活動でした。

石崎柚希：先輩が残してくれた東北大会出場を引き継ぎ、全国大会をめざしたいと思います。

安部善映：こども農園の管理や運営、土日が主体のこども食堂は大変ですが、面白い活動です。

佐藤風馬：置農生の活動が、地域の親子や家庭のために役立っていることがうれしい。

淀野海翔：私は子供たちの子守り役が多く大変な時もありましたが、楽しかったな。

《講評》

石川剛士：様々な方との連携と君達の地道な活動が実を結んでいます。さらに発展させましょう。

江本一男：3年生が残してくれたプロジェクトを発展させ、置農版こども食堂を完成させよう。